

幼稚園で「気になる子」の傾向

——保育者の記述分類——

吉 村 智恵子

Kindergarten Teachers' Classification of Children in Trouble

Chieko YOSHIMURA

問題と目的

最近、専門家に相談するほどではないが保育において「気になる子」というものが、取り上げられるようになってきている。さらに、ADHD（注意欠陥多動性障害）のように、集団保育の場で「気になる」レベルにとどめておくことなく、的確な対処の方法を意図的に用いなければならない事例も多く示されるようになってきている。これまでに、筆者は、保育者の「気になる子」に対する「幼児理解」や「関わり」について検討を行い、その結果、保育者が質問紙で答えた幼児に対する関わりが、「援助的」であろうとしたり「肯定的」であろうとすることと、幼児に対する捉え方に「困惑感」「不安感」という感じ方を抱いていること、保育者と幼児との間の「信頼関係」をどのように感じているかの3点が相互に関連しあっていることがわかった（拙稿1999）。しかし、これらの分析は「気になる子」全体に対する「幼児理解」と「関わり」に関するものであった。「気になる子」に対して保育者が抱く「気になる」点というものには、保育者のもつ「幼児理解」の特性と「関わり」のスタイルが相互に関連しあっていると考えられる。そこで、本稿では、保育者が記述した「気になる子」についてカテゴリー化を試み、その上で、各カテゴリーと保育者の幼児への理解と関わりを関連させて検討することを目的とする。

調査の方法

1. 調査対象

愛知県下の幼稚園の約6割に当たる300園（公立幼稚園63園、私立幼稚園237園）を名簿からランダムに抽出し、調査用紙3部ずつを園長宛に郵送し、保育経験1・2年、3～5年、5年以上の保育者各1名の回答を依頼した。

回収された回答は130園（回収率43%）385部（内有効回答380）であり、内訳は下記の通りであった。

①設置者別園数及び回答者数

公立幼稚園 38園、103名

私立幼稚園 92園、277名

②回答者保育経験年数

3年未満109名、3年以上5年未満123名、5年以上148名

平均年数5.47年 (SD = 5.39、範囲1年目から30年)

③回答者年齢

平均年齢26.15歳 (SD = 6.00、範囲20歳から55歳)

④回答者性別

女性380名

2. 調査用紙発送と回収時期

1997年2月25日発送、3月31日まで回収

3. 調査項目 (今回の分析対象部分)

- (1) 回答する保育者に関する項目：保育経験・性別・年齢
- (2) 担任クラスに関する項目：幼児数・学年・担当保育者数
- (3) 「気になる子」に関する項目
 - ① 「気になる子」の年齢・性別・保育年数
 - ② 気になる点の自由記述
 - ③ 「気になる子」と保育者との具体的なエピソード (自由記述)

4. 「気になる子」について

「気になる子」について、保育者に回答を求めるために、下記のような説明を用いた。

【質問紙の該当部分】

保育をしていると、特に障害があるというわけではないけれども、何となく“気になる”という子に出会います。日常でも「今、ちょっと〇〇ちゃんのことを気になってる」とか、他の保育者から「先生のクラスの□□くんちょっと気になるね」という言葉がかけられたり、“気になる”ということばが会話の中にも出てきます。いま学年末を迎え、今年度担任された子どもたちの中にも“気になった子”“気になる子”“今も気になっている子”“来年度以降のことが気になる子”など、様々な“気になる子”があるのではないかと思います。その中から最も気になる子を一人思い浮かべて以下の問いにお答え下さい。

いずれも、下線部に必要事項を書き込むか、番号に○をつけてお答え下さい。

1. 気になる子について

- 1) 性別 1. 男児 2. 女児
- 2) 保育年数 (省略)

2. 気になる点について

- 1) いつ頃から気になりましたか。 ____月頃から
- 2) その子のどのような点が気になるかを教えて下さい。
- 3) あなたとの関わりで具体的なエピソード (出来事など) があればお書き下さい。

結果と考察

1. 「気になる子」の属性

(1) 性別

保育者が気になる子としてあげた幼児の性別は、男児272名、女児108名であり、ほぼ5:2

の割合である。各担当クラス内の男女比について尋ねていないが、一般的には1 : 1であることから、「気になる子」として男児が取り上げられる比率がかなり高いということが言える。

(2) 学年

3歳児123名、4歳児131名、5歳児126名であった。各幼稚園に経験年数の異なる保育者からの回答を求めた結果、各回答者の担当学年がほぼ均等に分散したと考えられる。

2. 「気になる点」(自由記述) のカテゴリー化

保育者から回答のあった「気になる子」についての自由記述を分析するにあたっては、以下の手順によって、カテゴリー化を試みた(表1)。

(1) 自由記述内容の項目化

自由記述された「気になる子」の姿や行動には、一人の幼児に関する記述であっても複数のカテゴリーに属すると考えられるような事柄が述べられているものが多く見られた。例えば「集団で行動しようとするとき、一人離れてしまうことが多い、赤ちゃんのようにアンアン泣く」や「友だちとの関わりが少ないこと、自己中心的な面、色の区別や数がわからない」といった記述である。これらを、なるべく単一の意味を持った項目にしていくことを行った。この手順により753項目が抽出された。

(2) 項目のグループ化

項目化された753項目を、元の記述の文章を参考にしながらグループ化することを試みた。同じ状態と想像されることが違う言葉で表されていたり、ちがう状態であろうと想像されることが同じ言葉で表されている場合もある。文脈を考慮しながらKJ法によりグループ化した。項目数が3個以下のグループについては、後の上位カテゴリーとの関連で、それぞれにおけるその他の項とした。その結果、全部で46のグループとなった。

(3) グループへの命名

項目をグループ化したものにそれらを代表する言葉を付すことを試みた。その上でそれらを下位カテゴリーとした。この命名に際して留意したことは項目ごとに込められている保育者の意図である。例えば「友だちを叩いてしまう」ということについて、「自分の思いが強く、それが通らないと手や足が出てしまう」という文脈の中で書かれている場合は、この項目は、対人関係の中にあって保育者は気になるとしていると考えた。友だちとの関係を調節することが保育者側の課題ともなる可能性が伺える。また、一方で「すぐ友だちに手が出る」という表現であった場合には、行動そのものに対して気になっているという解釈を行い、それに応じた上位カテゴリーを念頭に置きながら分類を試みた。従って、グループに付された名称の「攻撃性」や「消極性」など2回以上登場することとなった下位カテゴリーもある。この点については、よりの確な表現を見出すことができなかった結果と言える。

(4) 上位カテゴリーと下位カテゴリー

各グループへの命名により、下位カテゴリー化を行った結果、別グループであっても同様の下位カテゴリー名となったものは、分類された各項目に込められた保育者の意図が考慮されたためである。従って、上位カテゴリーは、幼児の気になる点がどのような場面でのこととして捉えているのか、どのような関係性が大きく関わっているのかを基準に設定した。その結果9つのカテゴリーとなった。同じ下位カテゴリー名の2つの項目群が異なる上位カテゴリーへそれぞれ分類されている状態をさらに減じて明確化していく必要があるが、今回はこの分類枠を用いた。

表1 気になる幼児に関する記述の分類

分類			記述例
大分類	小分類	番号	
情 動	不安	11	不安そう・何をやるにも自信がない・涙がよく出る・恐がり・いつも不安でまわりを見ている
	不安定・衝動性	12	情緒不安定・気分の波が激しい・怒りっぽい・自分の気持ちを抑えられない
	無気力	13	やる気が見られない・ぼんやりとしている時間が多い・無気力・ぼーっとしている
	表情	14	表情が乏しい・笑顔が見られない・寂しそうな顔をしている
	抑制的	15	我慢してため息・泣きたいのに泣かない・思ったことをなかなか出せない
	無関心	16	いろいろなことに無関心・自分のやりたいことが見つけれられない・上の空・興味がない
	神経質	17	少し神経質・気にする
	ふざけ	18	すぐふざけてしまう・わざとふざける
	その他	19	くじける・素直になれない・すねる・弱気
対人関係	消極的	21	子ども同士の関わりが全くない・友だちと関わりがない・周りに溶け込んでいこうとしない
	自己抑制	22	自分らしさが出せない・自分の力が出せない・自分の殻に閉じこもり・自分を出せない
	自己主張	23	自分の思いが強く・周りが不満になる・友だちに自分の意見を押し付ける・自分を出せない
	攻撃的	24	友だちに対し命令・乱暴・脅し・友だちに対してとてもきつい・人の嫌がることをする
	依存・甘え	25	担任に甘える・保育者を待ってじっとしている・依頼心が強い・担任とともに行動
	強調性	26	協調性がない・強調性が少し欠けている点
	分離不安	27	母親から離れられず泣く・朝おおかさんに抱っこして離れない・母親と離れにくい
	特定の子	28	同じ子と遊ぶ・特定の友だちとだけ遊ぶ・一人の子に対してとても執着心がある
	その他	29	人見知り・反抗的・思いやりがない・緊張
行 動	注意・衝動	31	人の話を静かに聞けない・集中力がない・落ち着きがない・多動・パニック
	消極的・遅い	32	行動が全般においてゆっくり・新しい環境にかかわろうとしない・自分からしない
	攻撃的	33	すぐ手が出る・乱暴・パンチ・蹴る・叩く・引っ掻く・乱暴
	逸脱・こだわり	34	他の子と少し変わったことをする・奇声と言えるような声で笑う・ひとつのことにこだわり
	意思伝達	35	意思が伝えられない・自分の気持ちをうまく出せず反対の行動・自分の思いをうまく言葉で言えない
	よい子	36	おとなの前では素直で「いい子」・おとなにとって都合の良い子・おとなの目を気にしすぎるところ
	幼さ	37	赤ちゃんのような口調と態度・乳児のよう・全体に幼い・赤ちゃんのようにアーン泣く
	一人・傍観	38	一人だけで違う行動をしてしまう・自主活動は傍観・とてもマイペース
	その他	39	家庭と園との姿異なる・家庭・園、友だちの中と3つの顔
生活習慣	食事	41	食事が食べられない・食事の仕方・偏食・給食を食べようとしない
	全般・身辺整理	42	生活習慣だらしない・身の回りのことができない・自分のことがきちんとできない・整理整頓
	生活リズム	43	生活不規則・生活のリズムの乱れ・休み癖・遅刻
	排泄	44	パンツが濡れても平気・おもらし・おむつを使っている
	その他	45	清潔感がない
認知発達	言語	51	言葉が出ない・オウム返し・言葉不明瞭・言葉が遅い・言葉が遅い・言葉がスムーズでない
	理解力	52	こちらが言うことが理解できない・理解力低い・理解に時間が要する・色の区別、数がわからない
	視線合わない	53	視線が合わない・目を見て話を聞けない
	会話	54	会話がうまくできない・会話がつかまらない・会話一方
	認識の仕方	55	他の子と観点が違う・周りが見えてない・名前呼ばれても反応しない・呼びかけに応じない
	絵画製作	56	単色使いの絵・製作の時理解遅い・クレパスの力入れ方
	その他	57	知的遅れ・独り言
集団生活	不適応・離脱	61	集団から外れている・集団生活に馴染めない・集団に適応できない・保育室に入りたがらない
	速度	62	クラスで一番遅い・他から離れる
運 動	発達進度	71	運動能力の遅れ・運動面の遅れ・不器用
家 庭	親の影響	81	母親の対応・母親が手をかけすぎ・父親との関係・母親が育児疲れ
	母子関係	82	家での母子関係・母親と子が依存しあいつている
	その他	83	家の問題・きょうだいとの関わり・厳しい曾祖母
障 害 等	自閉傾向	91	自閉傾向
	その他	92	右半身がやや不自由・病気（発作）・場面緘黙の疑い

3. カテゴリーの分布傾向

(1) カテゴリーごとの度数分布

上位・下位カテゴリーへ属する項目数と、各項目がどのような幼児について気になる点としてあげられたのかを見るための属性の分布と、気になる点をあげた保育者の経験年数による分布を整理したものを表2に示す。また、全体の度数分布を図1に示した。

753項目が9上位カテゴリーの中で、「行動」に220項目、「対人関係」に188項目、「認知発達」123項目、「情動」97項目とそれぞれに比較的多く分布していることが分かる。

項目数が多く見られた4つの上位カテゴリーについて、その下位カテゴリーの分布を図2～5に示した。比較的多くの項目が分類された下位カテゴリーは、行動の注意・衝動及び攻撃的、対人関係の消極的及び自己主張、認知発達の言語、情動の不安定・衝動性などがあげられる。

「気になる子」に関する記述には、注意・衝動、不安定・衝動性といった行動や情動の衝動性を示すものが多く、次に対人関係での関わりの少なさや自己主張に関するもの、言葉の遅れなどが比較的多い。

また、男女比から見ると、全体の5:2の比率に比べて男児が比較的多い下位カテゴリーは、行動の注意・衝動及び攻撃的、認知発達の認識の仕方等である。反対に女児の比率が全体よりも高くなっている下位カテゴリーは、情動の不安カテゴリーである。男児においては、落ち着き無く動く姿、女児については不安な様子が気にかかる傾向にあると言える。

(2) 上位カテゴリー別男女割合

図6に示すように、上位カテゴリーごとに「気になる子」の性別割合を見ると、「行動」「運動」カテゴリーに男児が多く、「障害等」「家庭」「対人関係」「情動」「生活習慣」カテゴリーが全体に比べて女児の割合が高くなっている。「障害等」「家庭」については度数が少ないので判断が困難になるが、親の影響下で問題と感じられている気になる点が女児に多くあることが伺われる。

(3) 上位カテゴリー別学年割合

図7に示すように、上位カテゴリーごとに「気になる子」の学年割合を見ると、5歳児の割合が全体に比べて多くなっているのは、「家庭」「情動」「生活習慣」であり、「集団生活」「認知発達」が少ない。4歳児は「集団生活」「行動」「認知発達」、3歳児は「生活習慣」「対人関係」がわずかに多く、「家庭」の項目が少なくなっている。

学年別では、大きくその学年の特徴が表されるような傾向は見られなかった。

(4) 上位カテゴリー別保育者の経験年数

図8に示すように、上位カテゴリーごとに保育者の経験年数の割合をみると、3年未満の保育者は「集団生活」「認知発達」がわずかに多くなっており「生活習慣」「運動」が少ない。3年以上の保育者は「生活習慣」が多く「運動」が少ない。5年以上の保育者は「運動」が特に多い割合を示しており、「家庭」「対人関係」がやや多い傾向が見られる。

(5) カテゴリーの分布傾向

以上から、上位カテゴリーにおいては、「行動」カテゴリーが多く、男児の割合、4歳児の割合が高く、保育者の経験年数による差はみられなかった。次に多い「対人関係」カテゴリーは、女児の割合が全体の中では高い方にあり、学年間の差はわずかであった。保育者の経験年数では5年以上の保育者がやや多くなる傾向にあった。

表2 カテゴリー分類別度数

分類			幼児性別		幼児学年			経験年数			計
大分類	小分類	番号	男児	女児	3歳児	4歳児	5歳児	3年未満	5年未満	5年以上	
情 動	不安	11	14	7	4	8	9	5	8	8	21
	不安定・衝動性	12	18	7	9	7	9	6	6	13	25
	無気力	13	13	4	3	7	7	7	6	4	17
	表情	14	2	5	1	3	3	3	1	3	7
	抑制的	15	4	2	5	0	1	4	1	1	6
	無関心	16	3	1	0	2	2	0	2	2	4
	神経質	17	3	0	0	0	3	1	0	2	3
	ふざけ	18	4	0	1	0	3	1	2	1	4
	その他	19	7	3	1	5	4	0	5	5	10
	計	10	68	29	24	32	41	27	31	39	97
対人関係	消極的	21	41	17	23	15	20	20	18	20	58
	自己抑制	22	3	2	2	1	2	2	2	1	5
	自己主張	23	39	19	20	16	22	14	16	28	58
	攻撃的	24	6	6	0	8	4	2	3	7	12
	依存・甘え	25	19	5	10	7	7	4	7	13	24
	強調性	26	4	0	1	0	3	3	1	0	4
	分離不安	27	6	3	3	4	2	4	1	4	9
	特定の子	28	2	4	2	1	3	2	0	4	6
	その他	29	9	3	5	5	2	6	2	4	12
	計	20	129	59	66	57	65	57	50	81	188
行 動	注意・衝動	31	62	12	22	26	26	21	27	26	74
	消極的・遅い	32	19	3	7	6	9	6	4	12	22
	攻撃的	33	46	6	18	24	10	17	16	19	52
	逸脱・こだわり	34	17	10	8	13	6	8	10	9	27
	意思伝達	35	12	6	7	5	6	7	4	7	18
	よい子	36	4	2	2	3	1	2	3	1	6
	幼さ	37	6	0	2	3	1	2	2	2	6
	一人・傍観	38	11	1	2	3	7	5	3	4	12
	その他	39	3	0	2	0	1	1	0	2	3
	計	30	180	40	70	83	67	69	69	82	220
生活習慣	食事	41	10	3	4	5	4	2	6	5	13
	全般・身辺整理	42	12	3	7	2	6	4	4	7	15
	生活リズム	43	3	2	0	1	4	0	4	1	5
	排泄	44	3	1	3	0	1	1	3	0	4
	その他	45	0	2	1	0	1	0	0	2	2
	計	40	28	11	15	8	16	7	17	15	39
認知発達	言語	51	29	13	23	13	6	14	18	10	42
	理解力	52	20	8	6	13	9	9	7	12	28
	視線合わない	53	12	3	7	6	2	7	2	6	15
	会話	54	9	3	2	7	3	2	5	5	12
	認識の仕方	55	15	1	3	9	4	7	4	5	16
	絵画製作	56	4	2	2	3	1	2	3	1	6
	その他	57	4	0	1	2	1	0	2	2	4
	計	50	93	30	44	53	26	41	41	41	123
集団生活	不適応・離脱	61	34	13	15	20	12	14	15	18	47
	速度	62	4	1	0	3	2	3	2	0	5
	計	60	38	14	15	23	14	17	17	18	52

幼稚園で「気になる子」の傾向

表2 カテゴリー分類別度数（続き）

分類			幼児性別		幼児学年			経験年数			計
大分類	小分類	番号	男児	女児	3歳児	4歳児	5歳児	3年未満	5年未満	5年以上	
運 動	発達進度	71	5	1	2	2	2	1	1	4	6
	計	70	5	1	2	2	2	1	1	4	6
家 庭	親の影響	81	6	5	2	1	8	5	1	5	11
	母子関係	82	3	1	0	3	1	0	2	2	4
	その他	83	3	2	0	1	4	1	2	2	5
	計	80	12	8	2	5	13	6	5	9	20
障 害 等	自閉傾向	91	0	3	2	1	0	1	1	1	3
	その他	92	2	3	1	1	3	2	1	2	5
	計	90	2	6	3	2	3	3	2	3	8
全体 計			555	198	241	265	247	228	233	292	753

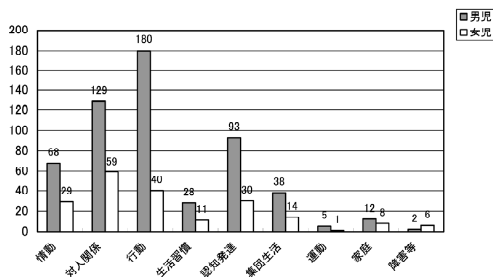


図1 カテゴリー別度数

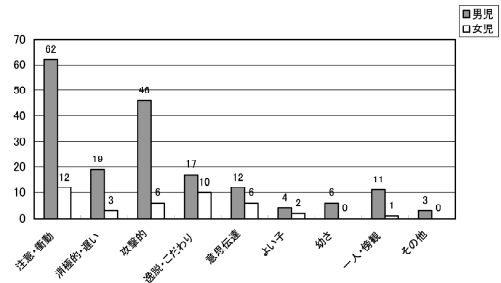


図4 行動：下位カテゴリー別度数

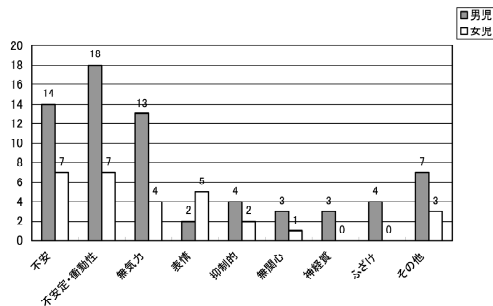


図2 情動：下位カテゴリー別度数

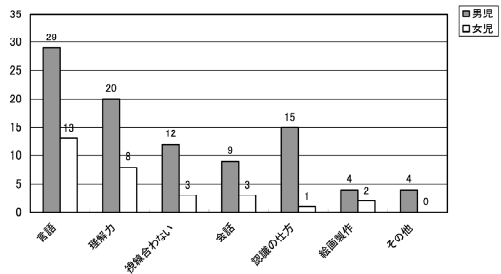


図5 認知発達：下位カテゴリー別度数

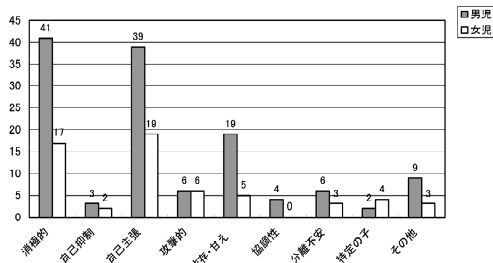


図3 対人関係：下位カテゴリー別度数

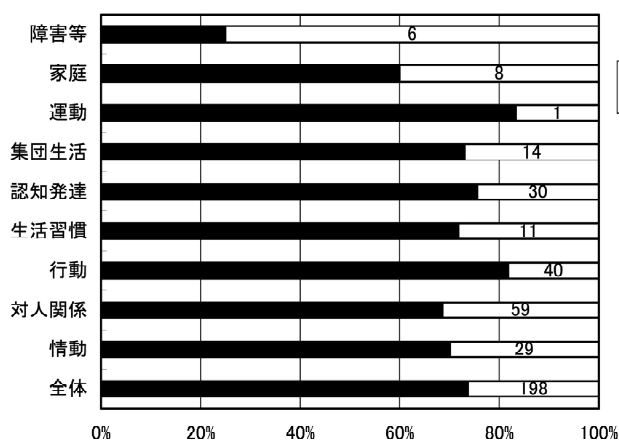


図6 カテゴリー別幼児男女割合

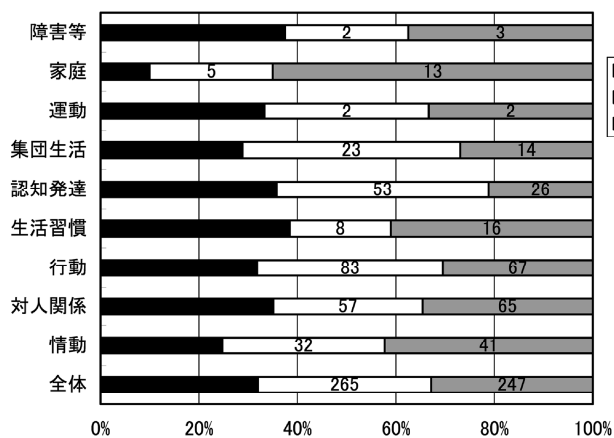


図7 カテゴリー別幼児学年割合

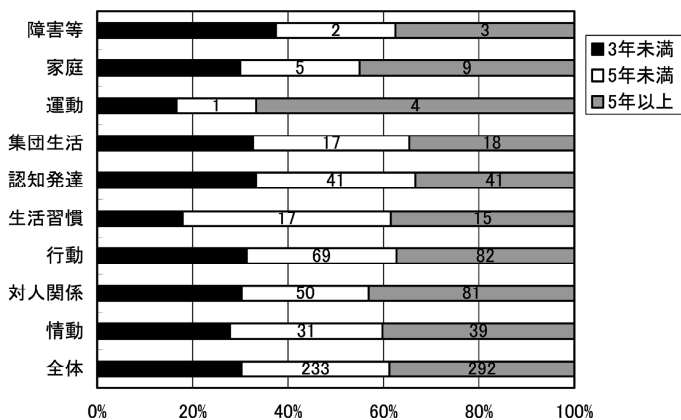


図8 カテゴリー別経験年数割合

4. 「気になる子」のカテゴリーと保育者の「幼児理解」「関わり」

(1) 保育者の「幼児理解」と「関わり」の傾向

筆者は、質問紙調査を行った結果、本論の対象となっている保育者の「気になる子」に対する「幼児理解」と「関わり」を因子分析等により既に検討している（拙稿1999）。その結果の概略により、保育者の「気になる子」に対する「幼児理解」と「関わり」の傾向を以下に述べる。

保育者の「気になる子」に対する「幼児理解」においては、困惑感因子と不安感因子が抽出された。困惑感因子は、幼児の「気になる点」に保育者がネガティブなイメージを持っており、幼稚園だけでの問題ではなく、かつ周りにも影響を与えるようなことであるという、改善に向けての困難さを保育者が感じているかどうかに関わっている。不安感因子は、困惑感因子が「気になる点」の中身に対する感じ方であったのに対して、この因子は保育者自身の取り組みや、幼児との関係について不安感を感じているかどうかに関わる因子と考えられた。両因子が見出されたことにより、保育者は「気になる子」を受容的に受け止めるかどうかということと、気になる点や幼児自身と自分との関係、自分の保育について不安があるかどうかということが影響していることが分かる。保育者は、「気になる子」の気になる点を分析的にみたりするのではなく、保育者自身との相互関係の中で問題や幼児像を理解している。

「気になる子」に対する「関わり」については、援助因子と肯定因子が抽出された。援助因子は、「気になる子」を見守り、直接的な働きかけ（他児との媒介・共に活動する・環境を整えるなど）を受容的・肯定的な態度で進めていくかどうかに関わっている肯定因子は項目数の少ないものであったが、現在の状態をそのまま肯定的に受け止め、幼児を統制するような関わりではなく、「気になる子」の気になる点とは関係なく、幼児と関わろうとするかどうかに関わる因子と考えられる。保育者の「幼児理解」と「関わり」の傾向は以上のように見られたが、保育者と「気になる子」の関係性を示す因子として「信頼関係因子」が抽出されている。この因子は、幼児が保育者を信頼し、よい結びつきがあることを保育者自身が感じ取っているかどうかを示す因子と考えられた。以上の各因子に含まれる質問項目に対する保育者の回答を「困惑感得点」「不安感得点」「援助得点」「肯定得点」「信頼関係得点」と得点化し、各保育者の「幼児理解」「関わり」の傾向を示すものとした。この得点によりクラスター分析を行い、保育者をグループ化した。そこで見出された10クラスターに属する保育者の「幼児理解」と「関わり」の特徴を以下に示す。（ ）内は各クラスターに属する保育者人数である。

第1クラスター（100名）：困惑感得点高、援助得点高

第2クラスター（70名）：困惑感得点高、援助得点低

第3クラスター（64名）：困惑感得点低、援助得点高、信頼関係得点高

第4クラスター（49名）：困惑感・不安感得点共に低、援助得点低、信頼関係得点低

第5クラスター（23名）：困惑感・不安感得点共に低、援助得点低、信頼関係得点高

第6クラスター（22名）：困惑感得点低、援助得点低、信頼関係得点低

第7クラスター（49名）：困惑感得点低・不安感得点高、援助得点低、信頼関係得点低

第8クラスター（23名）：困惑感・不安感得点共に高、援助・肯定得点共に低、信頼関係得点低

第9クラスター（22名）：困惑感得点低・不安感得点高、援助得点低、信頼関係得点高

第10クラスター（4名）：困惑感得点低・不安感得点高、援助得点高・肯定得点低、信頼関係得点低

(2) 「気になる子」の категорияと保育者の「幼児理解」「関わり」との関連

保育者が「気になる子」について記述した内容の категорияと「気になる子」に対する「幼児理解」と「関わり」の傾向を表すクラスターとを対応させて整理したものが図9である。

全体のクラスター分布と、各 категорияのクラスター分布を比較してみると以下のである。ただし、クラスター内の項目数の少ない第10クラスターと категория内の項目数が少ない「運動」「家庭」「障害等」については、わずかな数値の違いが割合の大きな差としてグラフ上に表されているが、傾向としては判断の対象となる数値ではないので、ここでは検討の対象としない。

情 動：第3、9クラスターがやや多く、第2クラスターがやや少ない。

対人関係：全体の分布とほぼ同じである。

行 動：第6、7クラスターがやや多く、第3、4クラスターが少ない。

生活習慣：第3クラスターが少ない。

認知発達：第1クラスターが少なく、第4、8クラスターが多い。

集団生活：第2クラスターが多い。

以上のように категорияごとにクラスター分布を比較した結果を、(1)で示した各クラスターの「幼児理解」「関わり」の傾向と対応させると、次のように考えられる。

保育者は、「情動」に関して気になる子に対し、どう対応すればよいかわからないといった困惑感はありません感じるということと、対象の幼児との間に信頼関係を感じている傾向にある。

「行動」に関して気になる子に対しては、困惑感は低く、援助するという関わりも低く、信頼関係があるという関係性も感じていない傾向にある。

「生活習慣」に関して気になる子に対しては、困惑感を感じないで、援助を積極的に行うという関係は成り立ちにくい。つまり、保育者がやれることではないような感じをもつ傾向にある。

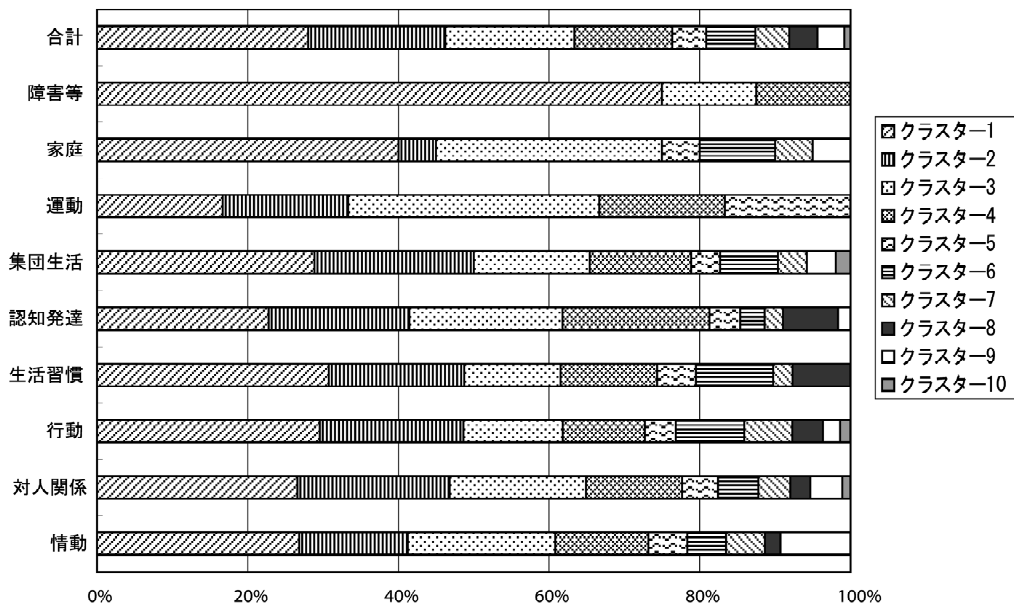


図9 カテゴリーごとのクラスターの割合

「認知発達」については、援助得点の低さに特徴が見られる。

「集団生活」に関して気になる子に対しては、困惑感を感じる傾向が高くなり、援助的な関わりが低くなる傾向が見られる。

まとめ

「気になる子」について380名の保育者が記述した内容を、意味ごとに項目化した結果、753項目が抽出された。さらに各項目はKJ法により47カテゴリーに分類した。各カテゴリーに属する項目（気になる点）に共通する要素を検討した結果、9つの上位カテゴリーに分類することができた。多くの項目数が属した上位カテゴリーは、「行動」「対人関係」「認知発達」「情動」カテゴリーであった。下位カテゴリーでは、注意・衝動、不安定・衝動性といった行動や情動の衝動性を示すものが多く、次に対人関係での関わりの少なさや自己主張に関するもの、言葉の遅れなどが比較的多かった。また、男女比から見ると、全体の比率に比べて男児が比較的多い下位カテゴリーは、行動の注意・衝動及び攻撃的、認知発達の認識の仕方等である。反対に女児の比率が全体よりも高くなっている下位カテゴリーは、情動の不安カテゴリーであった。男児においては、落ち着きなく動く姿、女児については不安な様子が気にかかる傾向にあった。次に、実際の関係性を含んだ幼児の捉え方としての「幼児理解」「関わり」傾向によって保育者をクラスターに分け、そのクラスターを形成する保育者が記述した「気になる点」についてのカテゴリーと「幼児理解」「関わり」傾向とを対応させて検討した。その結果、「気になる点」の違いに応じて保育者の「気になる子」に対する対応の仕方が大きく変化するということはみられないが、理解の仕方や関わりに一部特徴的な傾向を見ることができた。

文 献

- 藤崎春代・西本絹子・浜谷直人・常田秀子（1992）『保育の中のコミュニケーション——園生活においてちょっと気になる子どもたち——』ミネルヴァ書房
- 後藤宗理・岡村穰・鋤柄増根（1991）「保育者の意識に関する研究（1）——項目別平均値と因子分析による検討——」名古屋市立保育短期大学紀要30、p. 1-15.
- 五藤葉子・石橋尚子（1996）「園生活で気になる子どもたち」日本保育学会第49回大会、p. 440-441.
- 刑部郁子（1994）「子どもの「参加」を支える他者——集団における相互作用の関係論的分析——」東京大学教育学部紀要34、p. 21-30.
- 井口均（2000）「保育者が問題にする「気になる子」についての傾向分析」長崎大学教育学部紀要—教育科学—59、p. 1-16.
- 前原寛（1994）「気になる子を捉える視点——子どもを取り巻く状況を中心として——」日本保育学会第47回大会、p. 514-515.
- 西垣吉之・寺見陽子他（1996）「気になる子を理解する視点に関する研究Ⅰ——保育者の気になる子どもを見る視点——」日本保育学会第49回大会、p. 876-877.
- 大場幸夫・梅田優子（1992）「保育者が気になる子どもを捉える視点としての関係性について（2）」日本保育学会第45回大会、p. 756-757.
- 矢野由佳子・本保恭代・青木紀久代・馬場禮子（2002）「保育における「気になる子どもたち」（1）」日本心理臨床学会第21回大会、p. 353.
- 吉村智恵子（1999）「保育者の幼児理解の視点」聖和大学論集第27号、p. 255-266.